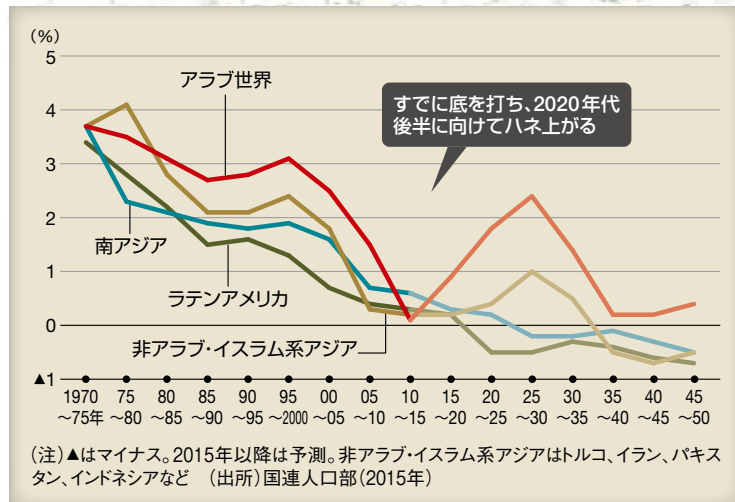


アラブ世界ではこれから若者が急増
—若年人口(15～24歳)の平均増加率(1970～2050年)—



劇的な少子化が
副作用もたらす国も

あまり知られていないが、中国の

して成長のために最適活用できれば、最近までの中国のように「人口ボーナス」がもたらされるが、先のような悪条件の下で放置すると政治・社会不安を増幅させる火種になる。若年層の膨張は諸刃の剣なのである。

このような人口動態だが、20年ごろを転換期としてリスク要因として拡大しそうな兆候を見せている。

このような現象を「若年層の膨張」(youth bulge)といい、米国では90年代から人口統計学者のみならず、安全保障・インテリジェンス専門家によっても研究が進められてきた。

脆弱で腐敗した政治体制、蔓延する貧困や失業、民族・宗教間の対立などによる政治・社会不安は、若年層が数や割合で急拡大することによって増幅し、大規模なデモ、騒乱、紛争や戦争にまで発展するリスクが高まるといふものだ。

若年層の膨張のメカニズムとは次のようなものだ。多産多死から少産少死に移行する人口転換は、栄養・衛生の改善や医療の発達による幼児死亡率の低下から始まる。やがてより多くの子供が成人に達するようになり、一定のタイムラグを経て夫婦は徐々に出生数を減らす。

このタイムラグの間に若年人口が急増するのに加えて、出生抑制によって子育てに追われてきた若者(特に女性)の時間と労力が解放される。この膨張する若年層を労働力と

このエコブームによって中東地域では、若年層は構成比こそ緩やかな縮小傾向にあるものの、人数の増加率は10～15年間に底を打ち、20年代後半にかけてハネ上がる見通しだ。上図は、この傾向がイスラム世界に共通しており、

日本の団塊の世代と団塊ジュニアを想像するとわかりやすい。急速に出生率が下落すると、しばらく若年世代の縮小が続くが、団塊世代が出産期に入ると母数が多いだけに、出産数もあらためて増加に転じる。こうした世代の拡大と縮小の波を、人口統計学では「エコブーム」と呼ぶ。

若年層膨張リスクは縮小するように考えられる。しかし、劇的な少子化の副作用によって、ここに新たな不安定要素が生まれている。

一人っ子政策に少し遅れて、中東地域でも盛んに出生抑制政策が実施されており、劇的な少子化が起きている。60年代末から現在までの各国の合計特殊出生率は、トルコが5・7↓2・2、チュニジアが6・9↓2・0、イランが6・7↓1・8、レバノンが5・2↓1・6であり、中国のそれに匹敵あるいは上回る。

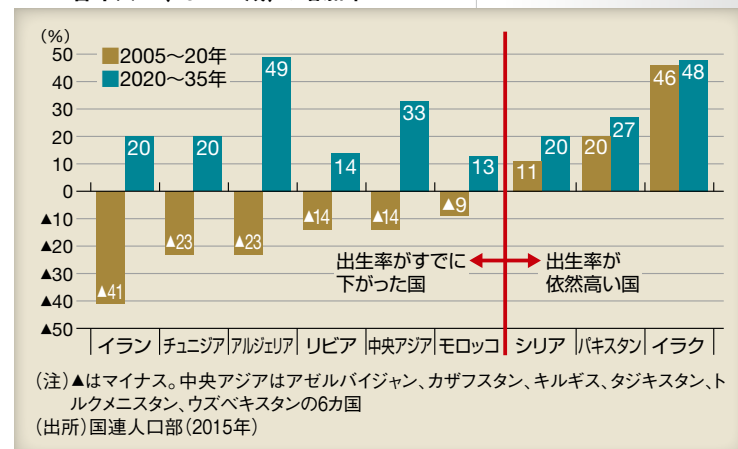
このことだけを見ると、将来的に若年層膨張リスクは縮小するように考えられる。しかし、劇的な少子化の副作用によって、ここに新たな不安定要素が生まれている。

若年層の膨張のメカニズムとは次のようなものだ。多産多死から少産少死に移行する人口転換は、栄養・衛生の改善や医療の発達による幼児死亡率の低下から始まる。やがてより多くの子供が成人に達するようになり、一定のタイムラグを経て夫婦は徐々に出生数を減らす。

このタイムラグの間に若年人口が急増するのに加えて、出生抑制によって子育てに追われてきた若者(特に女性)の時間と労力が解放される。この膨張する若年層を労働力と

人、人、人。若者の
不満が爆発する

「若年層の膨張」には2つのパターン
—若年人口(15～24歳)の増加率—



中でもアラブ世界で顕著であることを示している。若年層膨張リスクに関する中東地域の国別見通しは、その特徴によって2パターンに分けられる。下図のイランからモロッコに見られるパターン1は、典型的なエコブームだ。出生率がすでに1・7↓2・9まで大幅に低下しており、この影響で05～20年に若年層が大幅に減少する一方で、20年からの15年間で大幅な増加に転じる。

他方、同図でシリアからイラクに見られるパターン2では、従来型の膨張リスクが継続しており、エコブームの影響は限定的だ。出生率低下が3・0↓4・6にとどまっているために両期間で若年層の増加が続き、エコブーム効果によって20～35年の増加率はその前の期間を若干上回る。

目下はイラク・シリア情勢やISISなどテロの脅威への警戒感が強く、一般的にイスラム地域で継続する従来型の若年層膨張リスク(パターン2)を意識する向きが多い。しかし、アラブ世界のエコブーム(パターン1)は振り幅が大きい。各国政府が急速な失業問題の悪化に対処

しきれなければ、加速度的に若者の不満が蓄積しアラブの春の再来のような地域的な動乱のもととなる可能性も十分に考えられる。

このようにイスラム圏の人口統計はアラブ、アジアとも、20年代にかけて危険な兆候を示している。出生率の下落幅の違いによって特徴は異なるものの、そのリスクを注視する必要があるだろう。

なかしま・けいすけ ●1976年生まれ。神戸市外大卒、米シラキウス大学大学院修士(国際関係学修士)。米CSIS(戦略国際問題研究所)主任研究員を経て現職。

神戸市外国語大学准教授 ●中嶋圭介

政治・社会不安は若年層の急増で増幅される。写真は2013年1月、カイロ中心部でのデモ

『週刊東洋経済』2016年2月27日号 66-67頁掲載記事
著作権のため写真省略。当ウェブ(www.knakashima.net)掲載に際して東洋経済新報社の許可を得ています。無断の転載はご遠慮ください。